

元明治大学教授、澤田誠二先生を偲ぶ会が11日、東京・池袋の自由学園明日館で開かれた。筆者も生前、お世話になった者の一人として参加させていた。先生には、集合住宅の計画においては住民が主体であることを理念とし、インフィル（内装・設備など）生産の工業化は住まい手には多様性を、作り手には効率化をもたらすことを目指したオープンビルディングについて、長年ご教示をいただけてきた。

偲ぶ会には澤田先生と交流があった友人、元同僚が数多く出

席したが、遠くドイツからライネフェルデ・ウォルビス市のゲルト・ラインハルト元市長が出席され、四半世紀にわたる交流の思い出を語られた。元市長によると、澤田先生との交流は1999年5月にデッサウで開かれた東欧の大型パネル工法による団地再生に関するシンポジウ

建設

論評

団地再生の同志

ムが契機だという。

当時、西欧でも戦後建設された住宅団地は移民の受け入れによるスラム化などいろいろな社会的課題を抱えていた。統合後の旧東ドイツや自由主義体制に移行した旧東欧圏では旧ソビエトのコンクリートパネル工法で建設された、地元の方の言葉を借りると、ただ箱を置いただけのような大規模な住宅団地が数多く存在し、抜本的な改善が求められていた。

旧東ドイツのライネフェルデ市では、東西ドイツ統合後に基幹産業が閉鎖され、そこで働いていた人たちが数千人単位で転出し、団地は多くの空き室を抱えていた。縮小した人口規模にあった住環境に再生することに取り組んでいたのが、ラインハルト氏である。地元の高校で数

学、物理と体育を教えていた同氏は、政治体制の大転換により、図らずも市長に選出され、若い人たちが戻ってきたいと思うような魅力ある住環境を、スクラップアンドビルドではなく既存の建物を活用した再生手法により実現しようとしていた。その時、元市長にオープンビルディングという理念と手法で取り組むことを提案したのが澤田先生であった。

元市長は、団地再生案に住民たちの合意を得るのに心を砕いていた。住まいや環境、働く機会の確保などの複雑で絡み合った課題について、街区レベル、建物レベル、インフィル（内装）レベルに分けた分科会を設けて、住民主体で議論が展開された。国際的な研究組織CIBのオープンビルディング分科会に

所属する専門家が継続的に住民の議論や行政の判断を支援し、人口縮小時代の大規模団地の再生という困難な課題が解きほぐされていった。専門家集団をマネジメントする澤田先生と地域再生への熱い思いを持つラインハルト氏が、団地再生の同志として、肝胆相照らすように交流されることになった。

ライネフェルデ市の大規模団地の再生は、東西ドイツの統合直後という特殊な社会情勢や大規模な資金援助もあって成功を収め、世界各国の団地再生において参考にされることになった。人口規模が縮小し、環境問題への配慮も重要になった時代に環境整備手法として団地再生に取り組みましたお二人の志を大切に、現下の課題に取り組んでいきたい。

（誠）

